

# 世界が憧れるまち 「小田原」を目指して

小田原市長(神奈川県)

守屋輝彦



### はじめに

小田原市は東京から南西に約80kmに位置し、面積約114km<sup>2</sup>、人口約18万8000人の神奈川県西部の中心都市である。市域の西側は箱根連山、東側は大磯丘陵へ続く丘陵地帯、足柄平野を南北に貫流する酒匂川が市域の中央を流



小田原城天守閣

れ、南部に面する相模湾に注いでいる。かつては関東一円を治めた北条氏の城下町として栄え、風光明媚な自然環境と、夏は涼しく冬は暖かいという気候により、明治から昭和にかけては、政財

界や文化人たちの別荘地や保養地として愛された。

かまぼこや干物に代表される多彩な水産加工業、寄せ木や漆器などの高い品質を誇る木工業、良質な水が支える食品・医療・化粧品分野や精密加工技術分野の大手事業所の集積、古くからの商店街や歴史ある住宅地、新興住宅地、里山、中山間地と、実に多様なまちの特性を持っている。

### 東海道420年の歴史と 小田原駅周辺の再開発

慶長6(1601)年、徳川家康が東海道の宿駅伝馬制度を定め、街道の整備を始めてから420年もの月日が流れた。慶長9(1604)年には、江戸日本橋が五街道の起点となり、その後、五街道を中心

に一里塚や並木などが次々と整備され、東海道は日本を支える大動脈として、人・物・文化の交流に大きな役割を果たしてきた。

小田原宿は慶長6年に成立。江戸を出発してから9番目の宿場で、起点の日本橋からの距離は約80km、手前の大磯宿からは約16kmに位置した。幕府は江戸防衛のため東海道の主要河川に橋を架けなかったが、酒匂川も延宝2(1674)年に徒歩渡しとなり、旅人は川越人足の肩や輦台で川を渡った。小田原宿から箱根峠を登り三島宿に下るまでの約32kmは、「箱根八里」と呼ばれる東海道第一の難所であり、険しい峠越えに備え宿泊する旅人が多かった小田原宿は、東海道最大級の宿場町として栄えた。現在は「箱根八里」のブランド化に

向けた取り組みを進め、平成28年には小田原市、箱根町、三島市、函南町で箱根八里街道観光推進協議会を発足し、平成30年には「日本遺産」に認定された。

東海道沿いの歴史的建造物には、まちのシンボルである小田原城のほか、小田原宿なりわい交流館



歴史的建造物の「清閑亭」



令和3年にオープンした「小田原三の丸ホール」

や清閑亭、皆春荘などの貴重な観光資源が点在している。近年、小田原駅周辺では、広域交流施設ミナカ小田原や小田原三の丸ホール（市民ホール）のオープンにより、新たなぎわいが生み出されている。

今なお残る歴史的・文化的資源を点から線へとつなぎ観光交流空間へと整備することで、このにぎわいを東海道沿いに広げ、小田原らしい魅力あるまちづくりを進めていく。

## 広域的な都市間ネットワークの構築に向けて

近年は、首都圏中央連絡自動車道が整備されたことで、北関東とのアクセスが飛躍的に向上し、埼玉県や茨城県からの観光客が増えている。

一方で、私は県議会議員の時代から「ルックウエスト」の



伊豆湘南道路

キャッチフレーズの下、中部圏との連携を重要視しており、本市では、神奈川県、静岡県との関係市町と協力し、神奈川県と静岡県の県境をまたぐ新たな道路構想である「伊豆湘南道路」の実現に向けた取り組みを進めている。

本市の東西軸である国道1号は、箱根越えの急勾配、急カーブなどによる事故や大雨、積雪による交通規制などの問題を抱えている。また、熱海方面にかけての海岸線を縫うように走る急峻な国道135号は、慢性的な交通渋滞に加え、平成30年には台風による高波で搬送中の救急車が巻き込まれる被害が発生し、令和3年7月には熱海市伊豆山地区の土石流、翌年には小田原市米神地区の土砂崩れによる交通寸断が起きているなど、県境を結ぶ道路環境は極めて脆弱である。

この状況を打開していくには、災害に強く、ミッシングリンクの解消となる伊豆湘南道路が不可欠であり、これが実現されれば、県際地域の防災に寄与するのみならず、両地域の交流促進へとつながり、観光、産業、物流、医療、教育など、さまざまな分野が活性化される、未来の重要なインフラとなる。

姿を変え、今も人・物・文化の交流を担っている。伊豆湘南道路がこのバイパスとなり、東西を結ぶ新たな街道となつてさまざまな分野が活性化されれば、歴史ある宿場町として栄えた本市の歴史・文化と相まって、「世界が憧れるまち『小田原』」として、まちの魅力が最大限に磨き上げられると考えている。

## 東海道「箱根八里」

一口メモ

### 日本遺産「東海道『箱根八里』」

小田原は、稲葉氏や大久保氏など、徳川将軍家と縁の深い譜代大名が治め、江戸の出入りを取り締



まる箱根関所も小田原藩によって管理されていた。

小田原宿、箱根宿、三島宿を結ぶ約八里の道のりは、江戸時代の初めから「箱根八里」と呼ばれており、小田原宿から箱根関所までを東坂、箱根関所から三島宿までを西坂といわれた。

この険しい坂道には、当初滑り止めのために細竹が敷かれていたが、延宝8（1680）年以降、石敷きの道に改良された。

江戸時代を通して、朝鮮通信使や江戸参府のオランダ商館長の一行など、歴史に残る旅人が箱根八里を往来し、沿線にさまざまな工ピソードを伝えている。

企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」